

「体の置き場がないくらいに苦しかった3320グラムの筋腫をとっていただいて、2年が経ちました」...レポート・その1

楠本浩子（37歳）

## 教科書通りの子宮に戻った！

95年10月2日の手術日からちょうど2年が経ちました。2年ぶりに術後のMRIを撮るために、岡山から横浜にやってきました。JR鶴見駅に降り立ち、そこから手術前日に「これで元気になれるんだ」という最後の期待を胸に歩いた同じ道を、今もう1度、広尾に向かって歩いているのだと思うと感慨深いものがありました。

鶴見川にかかる橋を渡るとすぐに広尾が目の前に見えてきました。もう懐かしさと嬉しさと胸がいっぱいになりました。広尾では斎藤先生と看護婦さんたちが優しく迎えてくださり、本当のわが家に帰ったようなアットホームな雰囲気はあの頃のままでした。

今回撮った術後のMRIの画像には、見事に完璧で健康な子宮の姿が映し出されていました。先生が「ほら、見てごらん。教科書に載っている子宮と同じ正常な子宮に戻っているよ」と、とても嬉しそうにMRIを見せてくださいました。術前のMRIの画像と見比べながら、先生はまた「これが元通りになるんだよ」と、何度もかみしめるようにつぶやかれ、しばらくの間、先生と二人で喜び合いました。3320グラムもの筋腫で占められ、原型すら想像もできない状態だった子宮でも、こんなにも小さくきれいな形にちゃんと戻ることにも驚きました。あの胸の方までぎっしり詰まっていた筋腫を抱えて生きていくことにも疲れ果てていた手術前の苦しさを思い返すと、夢のようで、ここまで元の体に戻してくださった斎藤先生への感謝の気持ちは言葉では言い尽くせないほどです。

斎藤先生との出会いなしには、現在の私は存在しません。ここに、私が初めて先生に宛てて書いた手紙がありません。先生がとっておいてくださったものを、今回、再び目にするようになりました。これを読むと、あの頃の自分が鮮明によみがえってきます。その一部を紹介します。

## 手紙・その1

--3年前(1992年8月)より周期的に(必ず毎月)おなか妊娠したように張るようになり、(今はずっと妊娠6~7カ月状態で、生理後7~10日ぐらいで最高にパンパンの7~8カ月状態にふくれてしまいます)体の置き場がないくらい重苦しくてたまりません。生理が重いとか、不正出血とか、そういうことはなく、反対に生理が待ち遠しいくらいで、生理中とその後しばらくは、重苦しい日々の中でも比較的快調なのです。

これまで、こうしてずっと自分の体をだまし続けて、はた目には健康体を装って、今までなんとか生きてきました。よくもこんな体で普通の生活をして(演じて)いるなあと、自分でも感心するほど...。でも、健康体のふりをするのももう疲れました。さすがの私ももう限界かな...、ギブアップ寸前といった感じです。(今の私の状態は特定の知人、友人ぐらいしか知りません。両親にも言っていない。偽り続けている...、さぞかし驚くと思う)

本の中の患者さんのMRIの写真を見るたびに、「私の場合、いったいどうなっているのだろう...」と思えます。自覚症状にしても、おなかの中が胸の方まで筋腫でぎっしり詰まっている感じですから。--

## 手紙・その2

先生との出会いは、婦人画報社の『子宮をのこしたい 10人の選択』でした。大きなおなかを抱えて生きること  
に疲れ果てていた95年の4月、たまたま手にとったタウン情報誌に、「子宮を救われた女性10人の衝撃と感動のドキュメント！ 100名様にプレゼント」という囲み記事を見つけたのです。

それまで、新聞や雑誌に「子宮」という文字を見つけると、どんな小さな記事でも見逃さず目を通してきた私にとって、これほどの福音はありませんでした。すぐにプレゼントに応募し、届いた本をむさぼるように何度も読み返しました。

先生に初めてお手紙を書いたのは、その直後です。手紙をもう少し続けます。

--先生の『子宮をのこしたい 10人の選択』を読ませていただきました。私も子宮筋腫らしく、現在、おなか  
が妊娠7~8カ月状態（妊娠したことないので、わかりませんが）になっております。今年1月に友人にひっぱ  
られ、生まれて初めて産婦人科の診察を受けました。超音波をあてて画像を映すだけの検査でしたが、その結果は  
お医者さんが「...これは!!」と絶句するほどかなり大きな筋腫のようで、すぐに大きい病院を紹介すると言わ  
れたのですが、そうすると、あとはとられてしまうだけと感じたので、それからはこの病院にも行っていま  
せん。

でも、今までぜったい手術はイヤだと思っておりましたが、先生のこの本を読んでからは、もう先生しかいな  
い!、ぜひぜひ、1日も早く先生に手術していただきたい!!、と強く思うようになりました。早く楽になりた  
い。普通の体になりたいのです。--

## 死ねたらどんなにいいだろう...

振り返ってみると、入浴中、なんとなくおなかをさわってみた時に、梅干し大くらいの塊があるのに気づいたの  
が31歳の頃でした。さわるとグリッグリッと動く感じで、「あれ?脂肪の塊かな」と思っていたのですが、次  
第に卵大に、そして33歳を過ぎる頃からはそれがどんどん大きくなっていくのが自覚できました。

どうやら子宮筋腫らしいと感じてからは、漢方薬やら民間療法やらあらゆることを試してみました。健康雑誌に  
黒酢が子宮筋腫に効くと書いてあれば黒酢を飲み、アロエが効くとあればアロエジュースを。摺りこぎでゴシゴ  
シこすれば小さくなると聞けば実行し、足のツボ療法が流行れば足をもみ...。そして、あのヒーリングパワーの  
高塚光さんにも2度ほど会って、ヒーリングしてもらったりもしました。

しかし、私のおなかのしこりは決して小さくはなりません。でも、病院に行けば、子宮ごと取られてしま  
うことは目に見えていたので、病院に行くわけにもいかない...。解決の糸口さえつかめず悩み続けていた私に、  
安眠の夜はありませんでした。なにしろ、おなかの重苦しくて仰向けに寝ていられず、夜中に起きてはベッドの  
上に座ったまま眠るという状態でした。

そのうち、毎月、例のごとく生理と生理の間におなかのふくれ出すと、足や局部までパンパンにむくんでしま  
うようになり、下半身に鉛でも入っているかのように重く、歩くのも苦痛なほどにまでなっていました。そのう  
え、尿意はあるのに、トイレに座っても尿が出ない。筋腫が腎臓まで圧迫しはじめていました。

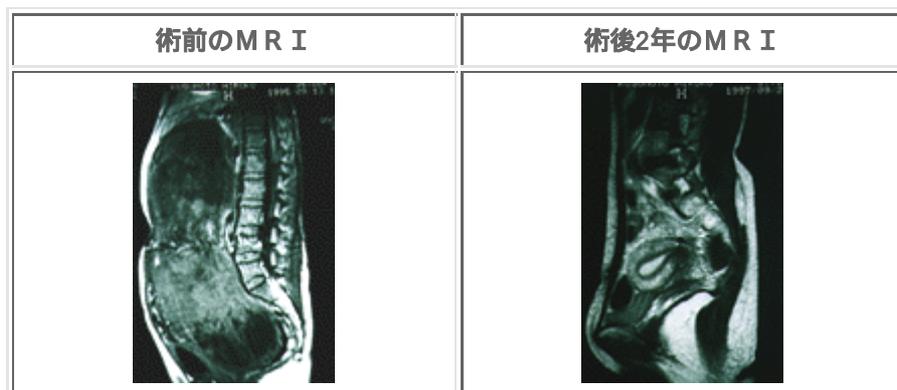
ついに限界が来たな、という感じでした。生理の前におなかのふくれしてくるのは、子宮を取り巻くたくさんの血  
管が怒張り血流がさかになるからなのだと後で先生に聞きましたが、あの重苦しさは言葉にできません。

そうして、どんどん私のおなかは大きくなって、筋腫だらけになっていったのです。それにつれて、どんどん体  
が辛くなって、今日生きているだけで精一杯...、でも、明日もまた生きなきゃ...という毎日でした。

一人になると涙があふれてきて、このまま死ねたらどんなにいいだろう、この病気がガンのように放っておけば  
死ぬようなものであったらいいのに...と、このままでは”半死に状態”で一生を過ごさなければならぬ私に  
とって、この苦しさを逃れるには”死”しかないと思い詰めてもいました。

喫茶店の窓際に座ってぼんやり外を眺めている時でも、視線は道を行く女性のおなかに向いているのです。みん  
な普通のおなかをしていて、私のような人は誰もいない。どうして、私だけがこんなに苦しいのかと、見ず知ら  
ずの女性に対して、健康であることを羨むより憎しみや敵意さえ感じたことも事実です。

もしかして、これは悪い夢なのかもしれないと、夜中に目を覚ましおなかをさわってみても、現実は大きく硬く  
ふくらんだおなかでしかありませんでした。



---

Copyright (C) 1997  
HIROO MEDICAL CLINIC

## 「検査から手術までのあれこれ、2年経った今でも鮮明に覚えています」...レポート・その2

楠本浩子（37歳）

### 手術を決心

一縷の望みを託して書いた手紙に先生はすぐお返事をくださいました。たくさんの資料も添えて…。そのお手紙には、「かなり大型の筋腫のようですが、まずは子宮を救えると思います。…貴女くらいの大きな子宮筋腫の患者さん数百例は救い続けています」とありました。その自信あるお言葉に、こんな大きな筋腫でも斎藤先生なら必ず助けてくださるんだと確信するとともに、斎藤先生に手術していただこうと、その時、心に決めていたのです。

95年の8月30日に初めて広尾メディカルクリニックへ電話をしました。先生のお手紙にも「MRI等の検査日を予約してから来られるとはかどります」とありましたので、「できるだけ早く検査をしていただきたいので…」と申し出たところ、「明日までに検査の日を決めておきます」とのことでした。翌朝、電話を入れると、検査は2週間後の9月13日に決まっていました。

### 苦しかったMRIの検査

検査当日、朝早く岡山から新幹線で新横浜へ。そして、JR鶴見駅から歩いて佐々木病院までなんとかたどり着きました。

午後1時半より検査となり、検査衣に着替え、生まれて初めてMRIとCTを体験することになりました。しかし、このMRI、通常ならストレッチャーに寝ているだけでいいのですが、私にとっては1時間近くも仰向けになってじっとしているということは、たまらなく苦痛でした。

CTはMRIより短時間でしたが、これもまた仰向け状態で機械が1～2センチくらいずつ移動しながら作動するため、じれったくて、まだかまだかという感じでした。

汗ぐっしょりになってMRIとCTを撮り終えた後、胸部レントゲン撮影、そして心電図もとり終え、長椅子で少し休んでいると、「楠本さん、すみませんが、もう1度、MRIを撮り直しますので…」との声。「えーっ！！もう1度！？ウソでしょー！！」、筋腫があまりにも大きかったので、撮りきれなかったらしいのです。

### まるで火葬場の炉の中のように

さらに1時間の苦痛が始まりました。再度、ストレッチャーに乗せられてMRIの中へ。検査の途中、もはや耐えきれず目の前にあったボタンらしきものを押してみました。すると、技師の方の声がして「あ、動かないでください」。しかし、私はマイクラしきものに向かって「気分が悪いんですけど…」と訴えてしまいました。技師の方は「あと10分ほどがんばってください。それで、おしまいですから」…。

そう言われてからの10分というのが異常に長く感じられて、「早く私をここから出してよー！！」とか「もういいから、このまま私を殺してー！！」などとずっと心の中で叫んでいました。MRIの作動中は、体に響くほどのかなり大きな音が聞こえ、それがなんだかモクギョの音にも似ていて、まさに火葬場の炉の中に入れられた気分でしたから。

MRIからやっと出られた時にはストレッチャーに汗の人型（ひとがた）ができていました。その後、血液検査と尿検査を終えて、これで全ての検査が終了。あとは広尾に電話を、と思っていると、事務長さんが心配して車で迎えに来てくださっていました。

## カルテに「巨大子宮筋腫」

佐々木病院から車で5分ほどの住宅密集地の中にぼつんと広尾メディカルクリニックはありました。中へ案内されてびっくり。およそ病院とは思えない、プチホテルかペンションのよう。ポカンと見とれていると、2階から白衣姿の斎藤先生が階段をスタスタと降りてこられました。

「初めまして」の挨拶もそこそこに、開放的な診察室に通されました。さっそくMRIのフィルムをご覧になるやいなや、先生は「すごいね」と一言。そして、カルテに「巨大子宮筋腫」と書かれているのを、私はポーッと見ていました。私も初めて実際に自分のおなかの中を見たわけですが、我ながら「本当にすごいな」と思いました。



おなかの中が筋腫でぎっしり詰まっていた、ほかに何も無い。胃や腸はいったいどこにあるのか見あたらない。それどころか、筋腫が背骨も巻き込んで、背中にまで達している…。

胃も腸も何もかも胸のあたりに押し上げられているらしく、先生は「よくこれで食べて排泄できていることだね。よほどあなたが鈍感なのか我慢強いのか」とおっしゃり、「でも、ちゃんとした子宮が残っているから、子宮は元通りになるよ。救えるよ」と言ってくださいました。



その言葉に「やった！！」と私は心の中でガッツポーズをとりました。この言葉が聞きたくて、私はここまでやって来たのです。もう安心です。

## 待ち遠しかった手術

「救えるよ」と言ってくださった先生の言葉は決して意外な言葉だとは思いませんでした。なぜなら、斎藤先生なら必ず助けてくださると信じていましたから。こうなれば、できる限り早く手術していただきたくて、手術は19日後の10月2日に決まりました。

帰りの新幹線の中でも、体はあちこち苦痛だらけでしたが、これも10月2日までの辛抱だと思うと、心の中はさわやかでした。

それからは1日1日と手術の日が近づいてくるのが嬉しくて、早くその日が来ないかな…と待ち遠しかった。なんでもできる健康な体になれるのですから。何年も得られなかったものがもうすぐ得られるという喜びでいっぱいでした。

手術前日、母と広尾の近くのホテルに1泊し、大きなおなかで過ごす最後の夜を迎えました。数日前から例のごとくパンパンにおなかかふくれ上がる時期に入っていたので、ホテルでも夜中にベッドに起き上がって痛みを凌いでいました。

手術当日、9時に広尾に到着。2人目の手術ということで、その時間まで暢気なことに母と2人できれいな病室でポーズをとって写真を撮ったり、テレビを見たりとリラックスして過ごしました。

## 助手の先生が「臨月ですか？」

1人目の方の手術が無事終了し、いよいよ私の番となりました。ドラマのように身内の人に「がんばって！」なんて言われながらストレッチャーに乗せられて行くのかと思ったら、手術室まで自分で歩いて行って手術台上がるので、なんだか拍子抜けという感じでした。

そして細い手術台の上で、腰椎麻酔をするためにエビのように丸くなるようにと言われました。「平均台の上のおなかの大きな裸の曲芸師」…そんな奇妙でアクロバチックな格好を想像すると、これから手術だというのに、なんだか笑ってしまいました。

アイマスクをされ、口には酸素吸入器がつけられました。「いよいよこれからなんだな」と少し緊張していると、助手の先生が「臨月ですか？」。おそらく、私のおなかを見て思わず口をついて出たのでしょう。すると、

斎藤先生が「いや、シキウキンシュ！！」と返されているのが聞こえ、「あー、言われると思った...」と思ったものです。

「よろしくお願ひしまぁす」とベッドの上から言うと、「大丈夫」というように看護婦さんが私の左手をトントンとたたいてくれましたが、その間にすでに私のおなかではカチャカチャと筋腫の取り出し作業が始まっていました。「えっ、こんなにもいきなり始まるものなの？」と戸惑ってしまいました。

### **遠のく意識の中で「先生、助けて！」**

途中、スーッと意識が遠のいていく感覚が何度かありました。酸素吸入器を持つ看護婦さんの手が絶えず私を揺さぶり起こしていました。

血圧がどんどん下がっているらしい...。息苦しい...。輸血を始めると少し楽になって、手術中の音をまた聞き取る余裕も出てくる。先生が「カンシ」と言われると、体の中のを引っ張ったり、取り出す感覚もわかりました。

でも、また、すぐにスーッといてしまいそうになるのです。周りでは、輸血用の血液が足りなくなって、緊急に取り寄せている様子で・・・遠のく意識の中で「先生、助けて！」と叫んでいました。

しかし、最後にすごい早さで縫合されているのは、なんとなくわかりました。そして、手術直後、先生が「楠本さん、お母さんが泣いて喜んでいるよ」と教えてくださいましたが、うなづくことしか私にはできませんでした。

**「止血のために東邦に転院、そして再手術。改めて、東邦の皆様、斎藤先生に感謝！！」...レポート・その3**

楠本浩子（37歳）

**手紙・その3**

手術は5時間くらいかかったと聞きました。摘出された筋腫は3320グラム。偶然にも、それは私が生まれた時の体重とほぼ同じ重さでした。

手術後、病室に移されて、夜明けに恐る恐るおなかに手をあてた時の感動は忘れられません。その時のことを、ずっと後になって先生に宛てた手紙にこんなふうには書いています。この手紙も先生がとっておいてくださったものです。



--今、私はおかげ様でとっても元気です！唯一、おなかのキズが、かつて私が病人だったことの証です。ほんの1年ちょっと前まで、大きなおなかをかかえて苦しんでいたのがウソのようです。あれは、ずっとずっと遠い昔のできごとだったようにも思います。とてもありがたいことです！

先生に手術していただいて、ほんとうによかったと思っています。手術直後、夜明けに目が覚めて、恐る恐るおなかを手でさわってみた時、"おなかがぺしゃんこになっている！！"、あれは感動ものでした。（まさにあの時は、ししゃもの子をとったみたいに、肋骨から下がごっそりえぐられた感じでした！）こんなおなか、長いことさわったことがない。その時、やっと解放された！と実感しました。うれしかったです。私はもうそれで十分でした。あとはもうこわいものなど何もない。出血が止まらなくて、あのムダな肉塊を先生がとってくださった...、それだけで。

でも、東邦で子宮を全摘するかもしれないと説明された時、もう1度手術を受ける恐さなどはなく、ただ子宮をとられる！というショックで頭がいっぱいでした。「それじゃあ、今までの私の苦労はなんだったの！」といった感じで、"死んでもいいから、子宮は残してヨ"と心の中で叫んでいました。でも、頬をつねっても、ひっぱたいても夢なんかではなく、これが現実でした。だけど、先生にすがるをお願いした時、「大丈夫だよ」とおっしゃってくださった。その言葉に安心しました。"絶対、大丈夫だ"って。--

**止血のために再手術**

東邦で子宮を全摘するかもしれないと説明された時...、というのは、術後に出血が止まらず、手術の翌日の深夜に、先生の出身校である東邦大学医学部附属大森病院に転院し、そこで出血の原因を突き止めるための再手術をした時のことを指しています。筋腫がとても大きかったために手術中の出血が多く、輸血を行いながらの手術でしたが、その出血が術後1日経ってもなかなか治まらなかったのです。

かなりの貧血状態だったらしく、自分では意識をしっかり持っていたつもりでしたが、さすがに頭がボーッとして、考えがまとまらない状態でした。その日、東邦では大村先生のオペの手が空き次第、手術が行われることになりました。

私の周りで何もかもが流れるように事態は進んでいったのでした...

大病院の手術室は 通路の両脇にいくつも手術室が並んでいて、まるで人間再生工場のようにあちらこちらで手術が行われていました。今度は全身麻酔だったので、手術台に移され、酸素吸入されているうちに意識はなくなっていました。

東邦の手術室には斎藤先生も入ってくださり、終始「大丈夫だよ」と声をかけてくださいました。付き添ってきた母が「どうか子宮を残してやってください」と言うのにも「大丈夫です」と励ましてくださったそうです。一度閉じたおなかをもう一度開けての手術となりましたが、その結果、出血は腹膜にそった血管からのものであることがわかり、止血の処置後、子宮は残りました。先生への手紙には、その時のことを書いています。

## 手紙・その4

--東邦で手術を受けた時、あの変な体験（手術中、一瞬、自分で自分を見ていたような気がした…。手術台の上の自分に管やら液やら流し込まれている自分が見えた）、臨死体験というのか、幽体離脱か、ただの想像か夢かわからないけれど、その中でなぜだか確かに“あ、子宮は残ってる！”と感じました。だから、手術後初めて母に「子宮は残してもらったよ」と聞いた時も、「わかってる…」という感じだったんです。

やっぱり女は子宮にこだわってしまいます。「死んでもいいから、子宮は残して」なんて、体は死んでなくなっているのに、ぼつ～んと子宮だけ残っていたらおかしいですね。

それからはもう入院生活は私にとって興味深いこと、楽しいことばかりで、病院 ホテル暮らしをエンジョイしました！入院なんて絶対したくない、するはずがない、と思っていた私ですが、入院とはこんなに楽しいものだったのか！手術を受けてみるのも後になってはいい思い出であり、人生において貴重な体験です。そして、先生、看護婦さん、ヘルパーさんたちの献身的な医療と看護には改めて深く深く感謝したい 気持ちでいっぱいです。

シャバの空気を十分に満喫しつつした今では、不謹慎にも、また入院してみたい！ と思ったりもして。本当に本当にありがとうございました。 --

## 手紙・その5-東邦でお世話になった先生、看護婦さんへ

2度の手術から2年が経ちました。

私には今回の上京でぜひもう1度訪れてみたい場所がありました。それはお世話になった大田区大森の東邦大学医学部付属大森病院です。当時の看護婦さんは少なくなりましたが、それでも「あ、楠本さんでしょう！手術の時のキズはよくなりましたか」と私のことをよく覚えてくださっていて、とても感激しました。

東邦でお世話になった全ての方にお会いできなかったのが残念でしたが、しばらくの間、病院内を見学させていただきました。何もかもが懐かしいあの当時のままでした。

--皆様、お元気ですか。2年前、ごやっかいになりました“不良”入院患者こと岡山の楠本でございます。振り返ってみれば、大変だった時もありましたが、今は楽しい思い出でいっぱいです。先生や看護婦さんたちと雑談したこと。外出許可をもらって、たびたび東京見物させてもらったこと。入院仲間と病院内を探検したり、隣の病室へ行って夜遅くまでみんなでお寿司を食べながらおしゃべりしたこと。パジャマとスリッパで梅屋敷まで出かけていて、病院の入り口で看護婦さんに見つかったこと。今は懐かしい思い出です。

思い返せば、私が東邦へ運び込まれ、手術が決まった時ははっきり言って、もはや絶望的な気持ちでした。でも、先生方はあのまま“お花畑”を見に行ってしまうような私をひきとめてくださいました。本当にお医者さんてスゴイな！と思いました。

また、東邦の先生方、看護婦さんは優しい方ばかりで、とても居心地よく楽しく過ごさせていただきました。東邦での私にとって初めての入院生活は大変貴重な思い出となりました。

何よりも入院、手術の際に皆様にとってもお世話になったこと、私、一生忘れません。そして、緊急手術の際、連続の手術でご多忙にもかかわらず快く執刀してくださった大村先生。的確な判断でいつも優しく見守ってくださった、同じ女性として尊敬すべき長谷川先生。見舞い客のほとんどいない私のためにたびたび外出許可を出して下さったり、いろいろと精神的な面で気遣ってくださった笑顔がトレードマークの渋井先生。本当にありがとうございました。

また、いつかおじゃまします。皆様もどうぞお元気で…。 --

## なんでもできる体になった

今回のMRIの術後検査では、齋藤先生が以前おっしゃった「術後にまたMRIに入れてあげるよ。今度はあなた眠ちゃうよ」の言葉通り、半分、夢心地でした。術前検査でのあの耐え難かった1時間が、ほんの20~30分にしか感じられませんでしたから...

撮り終えたMRIの画像を先生と一緒に見た時、本当に先生の力はスゴイと思いました。あの化け物のような筋腫をかかえた子宮が今はなんでもなかったような顔をして、おとなしくちょこんと定位置におさまっているのですから。先生の腕は神わざです。

今はもうなんでもできる体になりました。本当に幸せなことです。ややもすれば、あの頃のことを忘れて、いろんな欲も出てきたりもしますが、いつもあの頃を振り返って考えよう--、それが私の指針となりました。

## 手紙・その6-敬愛なる齋藤先生へ

--この世に齋藤先生がいらしてくださったことに感謝します。私のような全摘すら困難だった手術を先生はやったのけてくださいました。

私が大きなおなかで先生の元へたどり着いた時、再手術の前の不安でたまらなかった時、苦しい時にはいつも先生の力強く頼もしい言葉がありました。

そして、先生の的確な判断により、私を東邦へ送っていただいたこと、とても感謝しています。深夜、東邦に移され、暗い病室へ1人ぼつんと入れられた直後は、正直言って、不安と寂しさで泣き出しそうでした。

しかし、後に6人部屋へ移ってからは、次から次へとたくさんの友達ができました。おかげで多くの人々と知り合えたこと、それは私の財産となりました。人生、何がどうなるかわかりませんね。

また、東邦に入院中、先生は何度も足を運んでくださいました。見舞い客のいない私にとって、先生や広尾の皆さんが私を見舞ってくださるのがとても嬉しかった...待ち通しかつた...。本当にありがとうございました。

先生に関して私が不思議に思っていることに、先生は私たちが頭の中で思っていること、考えていることを全て読みとれるんじゃないかということです。だから、私が言葉で言い尽くせない先生へのたくさんの感謝の気持ちは、先生ならわかっていたいただけますよね!!

でも、術後のMRIを撮り終えた日、これで広尾とも、そして先生ともお別れなのかと逆に悲しくなっていました。だけどこれからも時々、先生に会いに行ってもいいですか？先生はみんなの先生だけれども、私にとっては私だけの先生です。

先生に出会えてよかった。これからも時々、お便りしますね。

先生、そして広尾の皆様、本当にお世話になりました。ありがとうございました。どうかお体を大切に...。いつも、そしてこれからもずっと私たちをあたたく迎えてくれる広尾メディカルクリニックに感謝!--